

東京都における河川環境整備（位置付け）

■東京グリーンビズ（緑の基本計画）

100年先を見据え、取組の輪を拡大し、
東京の緑の価値を高め、未来へ継承していきます。

「まもる」取組

- 地域に根付いた緑（屋敷林等）を守る
- 豊かな自然を有する地域を保全
- 樹木を残す新たな仕組み
- 水道水源林の保全管理
- 持続可能な森林循環を促進



「活かす」取組

- 緑・自然が有する機能を活用
「グリーンインフラ」
- 公園の魅力を高めTOKYOの顔に
- 地域の名所として緑を活用
- 豊かな自然の魅力を発信
- 緑の多様な価値を活かす

「育てる」取組

- みんなで一緒に緑を育てる
「東京グリーンビズ・ムーブメント」
- まちづくりにあわせた緑の創出
- 豊かな緑や開放的な広場を創出
- 緑と水のネットワーク化
- まちのシンボルとなる緑豊かな空間を創出

「東京グリーンビズ」の取組の一つとして、
河川事業においてもグリーンインフラの観点も踏まえた緑化の推進などに取組む。

東京都における河川環境整備（グリーンインフラとは）

【グリーンインフラ】

社会資本整備や土地利用等のハード・ソフト両面において、自然環境が有する多様な機能を活用し、持続可能で魅力ある国土・都市・地域づくりを進める取組

(出典) グリーンインフラ推進戦略2023 国土交通省

▶ 河川や公園等での導入

河川沿いに加え旧河川敷、調節池敷地の緑化や、良好な水循環など自然環境の活用（既存の管理用通路の透水性舗装化）等の取組を行っていきます。

また、公園や道路、都営住宅・公社住宅での雨水流出抑制設備やレインガーデン等の導入を推進していきます。

旧河川敷の緑化イメージ



旧河川敷に緑道等を整備

- 雨水浸透機能
- ヒートアイランド対策
- 景観の保全など

本川や旧河川敷について自然環境が有する機能を活用した緑道などを整備

東京都における河川環境整備（モデル区間としての大栗川）

○ これからの環境整備

河川緑化を進めるとともに、
グリーンインフラを取り込みながら環境整備を推進

雨水流出やヒートアイランドといった様々な「リスクの低減に寄与する」生態系等の機能を積極的に活用して整備していく。

一部引用：国土交通省河川環境課より令和3年5月31日付け事務連絡
(「流域治水×グリーンインフラの推進について」)

○ 求められる機能（例）

① ヒートアイランド対策

雨水貯留等の機能を有する基盤で地下に雨水を貯留して、樹木や舗装から蒸発させる。

② 保水効果及び雨水流出抑制

雨庭等の雨水浸透貯留基盤を設け、雨を集めて地下浸透させる。

③ 生態系保全

◆ グリーンインフラの促進に向けた取組（案）

○ 河川管理用通路



○ 旧河川敷



○ 調節池



○ その他の機能

- ・自然の有する機能や仕組みをPRし、グリーンインフラについて都民の意識啓発を図る。



モデル区間（大栗川など）の効果検証（モニタリング）を踏まえ、他河川へ波及

3

神明橋～東橋区間の整備経緯

昭和58年 5月 本川の護岸整備により、流水機能を切替え、本川と旧河川敷になる



旧河川敷において、水の淀み、異臭の発生などによる苦情が寄せられる。

平成9年 3月 旧河川敷をコンクリート張りやU字溝などにより整備
(あいおい堀の導水も含めて)

平成24年10月 由木地区町会自治会連合会より、全川における環境整備の要望書が提出される。

令和3年 3月 鎌水町会より、旧河川敷の遊歩道化の実施を要望

令和4年度 グリーンインフラ整備のモデル区間に選定

令和5年度

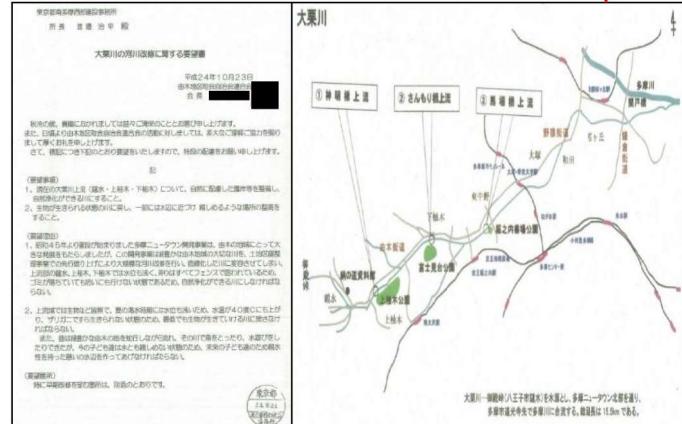
- ・本川・旧河川敷の整備検討

- ・旧河川敷の遊歩道化の設計実施

令和6年度

- ・本川の設計実施

- ・旧河川敷の遊歩道化の整備（予定）



他河川における環境整備の事例

主に1960年代から整備されたコンクリート護岸は、建物等が河川に背を向けてしまう等、まちと水辺が分断されてきた。



護岸の緑化や管理用通路の植樹等の水辺空間の緑化により、公園や街路樹等との「水と緑のネットワーク」を構築し、環境と調和した潤いある美しい都市を実現。

【神田川】藪による護岸の緑化と管理用通路に桜植樹



【乞田川】藪による護岸の緑化と管理用通路への植樹



【中川】コンクリート護岸に覆土し、芝張りによる緑化



大栗川における環境整備の事例（番場橋～新道橋）

整備前



整備後

